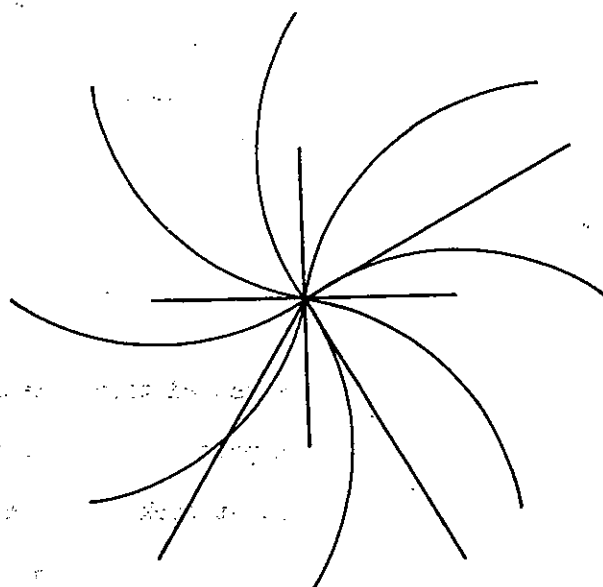


中根式

日本語速記法

(中根式速記法講解)

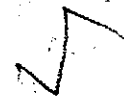
中根正親



大正5年2月

京都速記学校

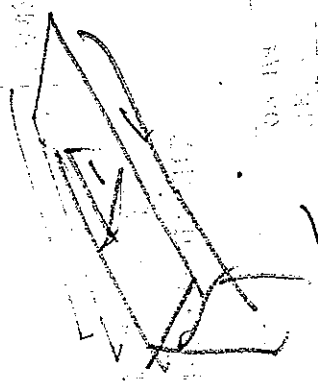
兼子及生君



兼子及生君



兼子及生君



目 次

巻 一	表 紙	1
	カ ッ ト	2
	序	3
	中表紙	4
本 文		
	速記学とは如何なるものか	5
	我速記界の現状及法式の分類	6
	複画、折衷、単画各派	7
	速記法則の価値	8
	中根式速記立案の方略と其特徴	9
	漢 字	10
	「訓読みは音読で書いて」	11
	「インツクキ」	12
	一般助詞的仮名	12
	結 論 、 特 徴 / 5. 箇 条	13
	研究者への注意	14
	速記を学ぶ人への指針	15
	上達曲線	16
	不急、反覆、姿勢	17
	ペ ン、練習法	18

第 1 章

基本線、濃線	19
線長、正側 負側、線の引方、上中下段	20
50 音 配定表 ヤヨラルロの区別、配定規則	21
50 音は 2/ 字がベース	22
50 音の覚え方	23
50 音連綴	24
基本文字を書くゾーン 同方向直線が続く場合の書方	25
練習 8	26

第 2 章

濁音、半濁音、練習 4	27
練習 5	28
符号のかたまり	29

巻 二 表 紙

第 3 章

長拗音	31
長音及拗音の別解 拗音の長音と短音	33
ア列、イ列、エ列の普通長音	34
長拗音総括表 ア行、カ行、サ行 タ行、ナ行、ハ行、マ行	35
ヤ行、ラ行、ワ行 長拗音連綴	36
練習 6、7	37
練習 9、10	38

練習 11、12	40
練習 13	41
第 4 章	-
インツクキ法	42
「イ」の書き方	44
練習 14	46
「ン」の書き方	47
練習 15	49
「ク」の書き方	50
練習 16	51
「ツ」の書き方	53
「チ」の書き方	56
「キ」の書き方	56
加点インツクキ法	57
「イ」 「ン」	57
「ツ」 「ク」 「キ」	58
拗・長音＋「ン」	58
拗・長音＋「ク」	59
拗・長音＋「ツ」	60



First edition February 1916

Reprint April 1981

Joint work Y. Nakane

H. Fujioka

M. Kotani

T. Kaneko

200 copies.

巻 三 表 紙

第 5 章

仮名遣い

第 6 章

助 詞

「ノ」の書き方

「ニ」の書き方

「は = ば」の書き方

「モ」の書き方

「カ」及「ガ」の書き方

「ヲ」の書き方

「テ」及「デ」の書き方

「ト」及「ド」の書き方

「エ」の書き方

「タ」及「ダ」の書き方

63

63

64

66

67

68

70

71

72

73

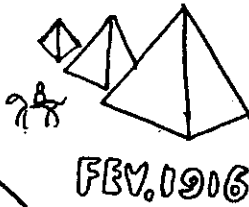
74

おことわり

1. 旧字体、俗字体は新字体に改めた。
2. 送りがなは注をつけてできるだけ現代に近くした。
3. 注をつけて類推して読んだもの、不明のものを示した。

通信教授

NAMANE'S
SYSTEM OF JA-
PANESE SHORTHAND
中々図式
日本語速記法

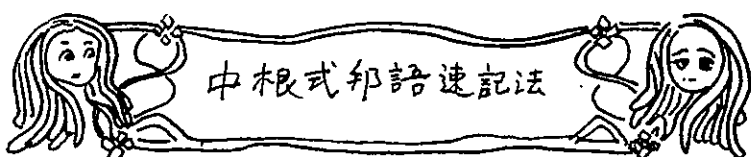


FEB. 1916



京都速記学校。





△京大工科大学学生中根正親氏創案 中根式邦語速記法は事実我国最新の速記法である。

去る大正三年五月、多年の苦心成って世に呱呱の声を揚げ 幾多の先輩をして其暫新にして 独創的なるに 驚嘆¹の眼を張らしめたが、当時本校創立以来實際的に其威力と声価とを昂めて来たのである。無論 此間に中根氏の研鑽に依り 取捨適応 益々面目を一新した。想うに坊間に散出された速記法なるものは皆 一様に最新式だと誇り 理想的だと囁き居るものの、殆んど同案同想であつて、甚しきは「掃き集め」の感すらある。是等に較べて本式の如きは公々然独創の二字を翳し得るのだ。宜しく大正三年五月十一日の大阪毎日新聞 並に速記雑誌「速記界」 大正四年十一月号を一覧せられよ。

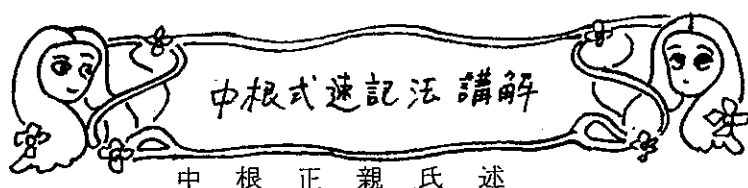
速記の利用や速記の将来などは何れ機関雑誌発行の暇、筆硯を更えて堂々侃々の論を遣る事として 本通信教授では夫れを略く事にした。達眼の士、青雲を望むの士、願くば努力自奮以て他日の榮譽を斯せられたし。

大正五年二月 認可 京都速記学校通信教育部

1. 「歎」 を「嘆」とした。

(2)





△速記学とは如何なるものか

社会の制度が進歩するに連れて 速記学の如きも近代に至り長足の発達を為して来た。言語と文字とは吾人の生存上 欠くことの出来ないものであるが、其文字に関して世界各国とも競うて簡捷なものを求めて居る。

日本でも近来ローマ字採用論が盛ん²になって来たが其ローマ字体を使い馴³して来た英国などで盛んに速記文字採用論が起つて居るから面白いと思う。

最う 彼地では実社会通用の文字となつて 聖書、小説 其他阿らゆる書籍が速記文字で出版せられ、特に実用上実業界では普通文字を駆逐して仕舞つて居る。日本に居る外人実業家に尋ねて見たら一番よく解るだろう。

彼等は「速記とタイプライターとを知らねば実業家になれない。実業界に入られない」と切言するのである。

⁴這麼な時代は向後の日本にも来るのである。否 現に迫りつつあるのである。従つて吾人は相共に大なる注意と講究を企て起さねばならぬ。余は余の式が完璧であるなどとは云わない。只幾分在来の諸式より進歩して居ると云うに過ぎない。だから より以上の研究を諸君と共に試み 些 か速記界に貢献したいと思つて居るのである。

2. 「盛に」を「盛んに」とした。

3. 「馴らして」を「馴して」とした。

4. 「シャマ」と読み「このように」の意味。

扱て此の速記学とは如何なるものであるかと云うに
是は早く書き綴る事の出来る文字其物に関する科学で
ある。抑も如何なる文字を用いて、流るる様な言語 或は
思想を書き写す事が出来るか？ これは大いに興味ある問
題である。諸君は宜しく⁶思いを茲に致して 拙式をして一層
完全なものに改良して戴きたい。

△我速記界の現状及法式の分類

日本の速記界は目下戦国時代である。従って彼のピッ
トマン式が欧米速記界の大勢を支配して速記の絶大
なる効果を生ぜしめて居るのに比べて甚だ物寂しい。
現在の邦語速記法の諸式を大別して 余は三種とする。
次に夫等の様式と是に属する代表的式を挙げる。

1. 複画派 新田鎖式 熊崎式
2. 折衷派 ガントレット式
3. 単画派 武田式 拙式（中根式）

以上の内 最も古き歴史を有つのは複画派であつて

鼻祖 田鎖綱紀先生は特に敬意を払う可き速
記界の大功労者である。尚、ガントレット氏は英人である。

△諸派短評

是は出来るならば此処に書く事を避けたい。最つと堂々と
証明的な理論を以て論じたいからである。併し少く
とも余の式を諸君にお勧めするに就いて⁷止むを得ず一
言述べて置く。無論極く簡単な結論文けである。

1 複画派

-
5. 「大に」を「大いに」とした。6. 「思を」を「思いを」とした。
 7. 「就て」を「就いて」とした。
 8. 「止を得ず」を「止むを得ず」とした。

複画派中の新派と称するものは寧ろ第2のガントレット式⁹に近づいて居る。即ち 複画派と単画派との混ぜ物になって来る傾向がある。是は要するに折衷派¹⁰並びに単画派の勝利を意味して居る。この複画派では他の二派に比べて手指の巧妙な運動に依頼し過ぎて、理論的に文字の短縮を行うよりも略字を以って用に充つる傾あり。或は全然短縮 或 略字に依らずして「ミミズ」書きする。従って少くとも二年以上の練習に依らずんば成業し難し。余の如きは高等学校時代より速記練習を試み 数度失敗した。即 入り易くして成り難き怨がある。

2. 折衷派

これは複画派から見れば正に単画派である。併し単に単画派から見れば五十音図に複画の臭みがある。余は何故にガントレット氏が全然単画にしなかったかを疑い、且つ残念に思つて居る。併し内容は到底複画式と称し難い程の優秀を認めねばならぬ。従つて是を折衷派と余は呼ぶのである。只余はガントレット氏が五十音図本画に複画臭を付したる為め、止むを得ず、あらゆる逆流線を許したるを悲しむ。

3. 単画派

余の式が出来る前までに単画派としては僅かに武田千代三郎（元県知事）氏の武田式が明治三十八年三月及四月 日本新聞に依りて江湖に紹介せられた計りで其当時から今に無識な批評家の毒々しい批評を受け

9. 「近いて」を「近づいて」とした。

10. 「並に」を「並びに」とした。

て居るが 余は現在までの諸式中 最も秀れた式であつた事を断言するのである。余は我が単画派が日本語速記に最適なりと論断する者であつて 余が若し忌憚なく理論を以て論破したならば各派は顔色は無いのである。是等是他日を俟つて論証する。要するに単画派では綴字が最も簡短で且つ明瞭である。複画式は単画派の綴字不明瞭と批評するのが普通だが 苟くもピットマン式と云う世界速記界の大權威物が許し用いて居る線を用いて居るものが不明瞭とは証言も甚だしいのである。況んや理論上却つて複画派の方が明瞭ならざる事を論証し得るに於てをやだ。兎に角 今後は単画派時代なる可き事を記憶せられたし。次に拙式の特徴の四 五例を上げる前に速記法の価値と云う事に就いて一言注意する。

速記法則の価値

多く人は速記は「アイウエオ、カキクケコ……」等五十音図の書き方さえ分れば宜いと云う感じがする。併し其五十音図丈け知つて 夫れと略字とで以て一つの速記法式だと思ふと大変な問題違いである。五十音図の符字を制定する位のことは誰れでも出来る。又略字を作る丈けなら幾らでも出来るのである。そこで速記法式としての価値を論ずる場合には 其「法則」の如何を以て可否しなくぢやならない。併して其法則なるものを表すのには大小輪、大小鉤、大小楕円輪、最小線、交錯線等を用うるのである。従つて是等を粗末にした派には立派なものが出来ない。

11. 「フゲン」と読み、「しい偽つて言うこと」の意味。

△中根式速記立案の方略と其特徴

速記法の価値は法則にありと話したが、其法則なるものは何にの要を為すかと云うに、夫れは無論字画短縮である。然らば如何なる法則を作つたならば参字が弍字で表わされ、又弍字が壹字に縮められるか？ 少くとも速記と云う意義からして何んな言葉でも簡短に書き表わしたいのは山々であるが、或る場合に稍や利便ありと思つた規則其物が仲々一般的に融通が利かぬ。是等は各研究者の頭を悩まし來つたものである。其処で余は些か後学者の研究の便を図り、尚一層の新工夫を斯界に出されん事を期して余の立案の方略を述べて見る。

我国で速記研究方略を始めて発表せられたのは我単面式の武田式有るのみ。次ぎに同派たる拙式がある。少しく速記法研究の経験がある人は善く解るだろうが、余等が新方式を案出するに要したる努力の半ば以上は即ち其立案の作り固めであつた。従つて色々の速記法則は其立案を満足せしむるに要する手段に過ぎない。従来この立案が甚だ輕んぜられて居つた。

武田式並に中根式は単面式として現われた唯二つ

の式なるが、兩式と他式諸式との内容比較は寧ろ眼を立案に向けらるる様勸るのである。以下簡単に述べる。諸君、日本人は仮名が発明せられる迄は何もかも漢字計りで書いたものだ。従つて日本語の総ては（外国音をも含んで）漢字で表わす事が出来る。即ち漢字其物は

夫程 日本文字の豎て糸 即ち經線である。併して是等の漢字は、或 場合は訓で、或場合は音で用いられて居る。其 処で余は此漢字の処分を第一にしくちゃ立派な法式は出来ないと思うた。而 漢字を結び合せる為めに助詞が要るし、助動詞も要るし、形容詞語尾も要るのである。

(この場合 動詞の語尾の変化は取らず) 語尾が日本文をば厳密に觀察するに於て、若し漢字で普通表わし得るものを取除いて仕舞ったならば残部は助詞、助動詞及形容詞語尾である事が解るのである。勿論 茲で助詞と云うのは一般的の意味を云い 助詞的性質の総称である とすれば「日本語は口語体、文章体とも、漢字の活字と助詞的仮名活字とを以て表わす事が出来る」と云える。
是が余の立案中の骨組である。¹²次に漢字と助詞的仮名文字との処分に移ったのである。

イ. 漢 字

幾万とある漢字が音と訓とで表わされるのであるが 音で読む場合には音数は至って鮮いが 訓の場合には音数は大変多くなり 而も其が複雑千万で 訓の各音間に特種の連脈を見出す事が出来ぬ。此不連絡極まる数個の音を如何なる法則の下に単縮せしめ得るか？¹³是迄の諸式は単画と云わず 複画、折衷派と云わず 皆 同行単縮を遣つて居る。即ち同じ行の文字が重なれば夫れを単縮すると云うのである。是は記音上非常に¹⁴苦しい大負担であることを特記して置く。

12 「次ぎに」を「次に」とした。

13 「是迄」を「是迄」とした。

14 「苦い」を「苦しい」とした。

此苦しい負担で以て漸くお茶を濁して居る——否 某々式に於ては此単綴された方が単縮せられた方よりも優って居ると云う逆結果さえ生じて居る。兎に角、同行単縮と云う方法が訓読みの場合の唯一の単縮法として用いられるのである。処で是れ以外の方法と云えば夫れは殆んど絶望的と云わねばならぬ。子音速記法などは無論役に立たないのである。¹⁵然らば余はこの訓読みの難境を如何に開いたか。夫れは最も奇抜である。即ち

「訓読みは音読で書いて翻訳の際は訓で読む」

である。例えば「甚」を「ハナハダ」と書かねばならぬ時には音読みで「ジン」と書き、翻訳の節 之を「ハナハダ」と読むのである。其他「徒＝イタヅラ＝ト」「即＝スナワチ＝ソク」「頗る＝スコブル＝ハ」等である。是れは頗る融通応用が利くものである。併して同一音で三字或は四字乃至六字の同音異義を表わし得られる。是は我国最初の試みであって 而も余は是迄多くの有識者をして忽ち鋒を折らしめたる得意の立証を有して居る。以上の説明で了解せられた通り漢字の訓読みは早や音読みの問題となった。

諸君、訓読を其儘にして同行単縮等の姑息手段を講ずるに對し 拙式では単縮の必要なる場合に際し、訓読みを音読に単縮し且つ其の音読を単縮すると云う三段単縮を行ふのである。而も其上に連続助詞の単縮を遣るのである。角うすると四段単綴である。

¹⁵ 「然らバ」を「然らば」と、以下助詞の「ハ・バ」を「は・ば」とした。

例えば 私=ワタクシ =シ=し 私の=シの=し

煩.=ワヅラウ=ハン= う 煩うて=ハンて= う

処で漢字の音は如何であるか？

余は研究の結果、漢字を音の上から二種類に別けた。

1. 二音より成るもの 例. 戦 形 実 白 劇 純
セン ケイ ジツ ハク ゲキジュン

2. 一音より成るもの 例. 可 孝 苦 不 弓
カ コー ク フ キュー

(拗音、長音は一音とす)

斯くの如くして余は漢字の内二音より成るものに関し

次の¹⁶事実がある事を知った。是は余の発見で有る。

「二音より成る漢字の語尾はインツ(チ)クキなり」

無論「チ」が語尾となる事が有るが語尾に「チ」を

持つ漢字は又必ず「ツ」の語尾の二音を伴って居る。是は

漢字典を調べて見たら直ぐ解るだろう。即二つの音は

何れか一つ訛り音でなくてはならぬ。併して寧樂朝時

代に「ツ」を「チ」に読み訛ったと云われて居る。

例 吉 キツ 一 イツ 質 シツ 日 ジツ
キチ イチ シチ ニチ

夫故 余は第一に一音の漢字を最も簡短にし次に

漢字の二音のものを最簡にしなければならぬと決心

したが一音の場合は単画が一番簡短であるとした。

併して二音の場合には逆記法を用いたのである。

ロ. 一般助詞的仮名

此等の内 最多数は助詞及助動詞である 併して

形容詞語尾並に動詞 名詞 代名詞等の語尾変化等は

非常に僅かである 殊に動詞 名詞 代名詞の語尾は本画

16 「事実有る」を「事実がある」とした。

を以て表わす方が都合が宜い。仮令ば 彼等＝カレラ
の「ラ」は矢張 カレ と同様に本画で書いたが宜い。¹⁷又
形容詞の語尾変化は「ク、シ、キ、ケレ」であるから是等は漢
字の「インツクキ」及助動詞 シ、ケレで表わし得。

斯く觀じ来れば助動詞的仮名の殆んど全部は助詞
並に助動詞だと云う事が文字の形觀上から云えるので
ある。因って余は助詞及助動詞を殆んど悉く簡短にし
た。無論余地の有る限り動詞 代名詞

ハ、 イ、及ロ以外

イ、及ロ以外 口語体の或る動詞、助動詞の略符号を
作った。然し是はイ ロに比べて末梢である此 等の
改構は早や論ずる要も無い。

注意 訓読みの場合に無単縮を助詞で補い得た。

「インツクキ」の効力は只漢字に於てのみならず所謂
大和言葉にも大なる勢力を持って居る事が追々分るので

ある。泣くわ  郷くと＝シバくと 

例 偉いか  いらんえ  芋の 

(無単縮) + 助詞

結 論

＝ 単縮

拙式立案 $\left\{ \begin{array}{l} \text{漢字} \\ \text{助詞的仮名文字} \\ \text{雑} \end{array} \right. \text{ — } \left\{ \begin{array}{l} \text{助詞類} \\ \text{助動詞類} \end{array} \right.$

特 徴

上の立案を満足せしむることを工夫したる結果 下の
如き特徴を出すに至ったのである。繰り返して云う
無単縮のものでも 助詞等を加えた場合には単縮さ

17. 「又た」を「又」とした。

れたのと同結果である。現在までの各派 各式が如何に助詞を軽々しく見たかは賢明な諸君の攻究に譲ろう。

- / . 「インツクキ」の書方
- / . 長拗音の書方
- / . 五十音図の本画の特殊¹⁸撰定（特に佐行、波行、多行）
- / . 「インツクキ」組合せ法
- / . 「長拗、インツクキ」組合せ法
- / . 長拗法
- / . 助詞の書方
- / . 助動詞の書方（下段使用）
- / . 口語助動詞、動詞の書方（下段使用）
- / . 訓読転化法（上段使用）
- / . 第一種線及第四種線の活用
- / . ラ行単縮法
- / . 助動詞の連続、助動詞と助詞の連続
- / . 同行「インツクキ」組合法
- / . 成句省略法 其 他

△研究者への注意

拙式は其立案其物の中根式と称したいと思う。今後の研究者は第一立案、第二何派を取る可きか、と云う事を¹⁹先に研究決定しなくてはならぬ。単画にしても何にしても特に注意して戴きたい事は「日本語速記法では出来る丈け多く日本語の特徴を取る可きであって諸外国語の特徴をも取り込んで 夫れで世界的共通速

¹⁸.

¹⁹. 「先きに」を「先に」とした。

記を作ろうとしても 夫れは無理である。何故ならば各
国語は夫々相異った特徴（音だけではなく 言葉の組織上）
を以て居るから 夫等の特徴を皆取り集めると云う事は出来ても
来ても 其 特徴を速記法則中に皆含ませる事は到底出
来ない。従って自国語の特徴を出来る丈け沢山取ると云う
事も不能になり畢竟 無価値のものになる訳である。尤
も各国語の音を綴り表わし得る様にして置く必要は
有るから是は何の式でも遣って居るのであるが 他国語速
記にも適応せんが為め他国語の特徴まで取り含むこと
は絶対に避けねばならぬ。是は無駄口乍ら 角う云う
野心の有る人を戒めて置くのである。

□ 速記を学ぶ人への指針

1. 練習にはペン及野洋紙を用いよ。実地上でも亦た同
様である。或 場合には鉛筆を用いてもよいけれど 出
来得る限り ペン或は万年筆 野 洋紙を用いねばなら
ぬ。ペン及洋紙を用いる事は複画派の田鎖式及折
衷、単画両派の諸式が皆其の通りである。
ペンは普通のペンで宜しい。然し余り堅過ぎては不可ぬ。
尚 濃淡線（濃 \ 淡 \ ）がよく区別され得る様
にペンの先端の尖ったものを用いねばならない。
そして出来得るならば全然万年筆を採用したい。
2. 十分間に仮名交りの文字で2500 位書けたら 天下闊
歩の速記者である。今日迄の経験に依ると一ヶ月で
500 乃至 1500 になれる。尤 も是は毎日平均一時間

位の練習である。尚 注意すべき事は練習は毎日少しの
時間でも規則的に欠かさずにやる事である。一日ウン
とやって三 四日遣らぬと云う調子の練習は一番損
である。又一日十数時間続け様に練習するよりも一
時間練習して半時間休んで又一時間遣ると云う方
が大変宜しい。何分技術上の問題²⁰だから何時手が上
達すると云って時が極って居ない。不知不知の内に百
二百… 五百… 千となるのである。始めは500まで書く
のが困難で有るし 夫れから千を越すのが又一寸辛い 1000
を越したら1500は夢の間に通り抜けて1700 - 1900
迄位進む。夫れから最後の2000を打越すのが一番辛
いのである。これさえ通れば2500位は訳はない。併し
て東京でも京都でも完全に2000書ければ最う速記
者云って事務を取扱うて居る。余は是迄色々忙しいの
で未だ練習と云う練習はした事は無いけれども十分
間に1800位は優に書けるのだ。尚世の多くの批評家
は余が机上の空論者見たいに云って居るが 夫れは大した
誤解である。余等は決して実地上の経験を有せないもの
では無いのである。

総じて技術はperiodically (定期的) に進歩し悪い。併
して階子段の様な形に進んで行く 即ち200か300位
速度が進むとそれから其勢では進まず暫く進歩が止まる
其際が非常に苦悶する時である。時に依ると最うこれ
で行き止まりでは無いかなどと思案に暮れる事がある。

20 「問題がから」を「問題だから」とした。

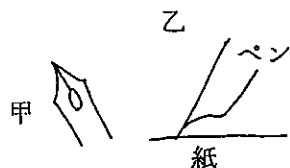
是が最も練習者にとって危険な時である。こんな時には決して失望しては不可なり 却て此技倆の停滯期は進歩期の先触れだとして 喜んで練習を励まなければならぬ。

3. 練習者は始めから余り書き急いではならぬ。先づ字画を正確に且つ美しく書く癖を付ける事が第一である。初めから矢鱈に急いで書くと 字体が無茶苦茶に成って翻読が困難になる。是はピットマン式 他で皆 角う教える。諸君に勧めたいのは先づ説明や規則などを能く吞込んで 夫れに対する練習を一々根気よく遣ると云う事である。併して其練習の際も前言通りの注意を守らなくてはならぬ。で無いと後で速度を出して書く場合に翻読に苦しむことが烈しくなるのである。

4. 実際 速記成功の秘訣は種々の練習を色々書いて見 又夫等が充分精確に書き連ね得らるる様に反覆練習すると云う事に有るのである。

5. 練習者は普通英字を書き綴るのと同じ様なペンの持ち方をして、肘を少し外方に開かせ “” なる濃線が最も容易に書ける様にしなくてはならぬ。即ち角う云う風にペンを持てば善いのである。繰返して云うがペンの彎曲部が下方に向って居

なくてはならぬ。即ち甲、乙両図の様にする。又ペンを軽く持たねばならぬ。そして手首をドッシリと本据えに据えては



ペンが甲の通りの方向に向けらるればよし

2/ 「苦い」を「苦しい」とした。

手首を机や紙の上に固着させる事は大禁物だ。即ち手先を自由自在に動かす事の出来る様に前腕の真中を机又は紙の端に据え付ける。斯うすると手首の方は自然と浮び上った形に成り 運筆が非常に自由に成る。

ペン軸のどの辺を握ったら宜しいかと云うに、ペンの先から云えば二寸 或は二寸五分、軸先から一寸 又は一寸五分位の処が最も好い。

練習者が机に向うた時に紙は机の端に平行にしたが宜しい。

6. ペンを使い馴れた人がペンを使うのは楽で有るが 未だ使い馴れない人がペンを使って ²²而かも書き馴れない速記文字を書くのだから 初めは中々指が思う儘に動かず 字体が亦た乱雑で見られないが、夫等は暫らくする 巧く馴れて来るのであるから 何も心配しなくてよい。

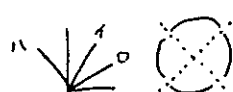
7. 初めの内は目で見えて考えて丁寧に書く。それから段々甘くな²³ったならば誰れかに読んで貰って聞いて書く様にする。尤も始終聞かなくてもよい。併し1000以上になったならば出来る丈け他の人に読んで貰ったが好い。そうして耳の練習を為なければならぬ。尚も一つの練習法はペンも紙も無くて出来る。夫れは指で書いて見る事である。何にか本でも読み乍ら一方指を動かすのである。其時眼を本から離さなくてもよい。即 聞いて 書いて速度幾許、見乍らペンで幾何、見乍ら指で幾許と一々記録を作らねばならぬ 又た翻訳も大切である 翻訳は速記した時間の六倍かかる。

22 「而か」を「而かも」とした。

23 「うまく」と読む。

□ 第壹章 基本線

8. 現今 世界に於ける各速記方式では 線状の基本文字を²⁴作定して居るが ビットマン式で許し用いて居る線は次の形である 因みにビットマン式は前述の如く速記界の大権威物であつて ビットマン先生は実に斯界の大恩人であつた。



(甲)



(乙)



(丙)

左図の通り基本線は僅

かに²⁵13個である。甲図

に於て右側ロに相当する

線が左側に無い事は特に注意して貰いたい 即 右側にイ、ロ 両線有るに不拘 左側ではハ壹本である。是れは如何なる本にも説明してないから、日本では既に色々の式に用いられて居るものの、實際夫れは間違いである。余の实地練習に依り 左側の二線は書法上区別し難き結果があつた。百年以上の活歴史を有するビットマン式は発表後 60 年間は絶えず 多くの熱心家に依りて改善せし記録を残して居る。

尚お 甲図中 ロ線を除き 他は甲乙丙とも皆 濃線と

9. 為すことが出来る。由来 濃淡の区別は実地上不可能と云う論者があるが、²⁵世界的大速記法 ビットマン式が濃淡を採用し、天下に活用せられて居ると云う事実を何んとするのだろう。我等 日本人は特に器用だと云つて居るに不拘、平生我等が不器用だと嘲つて居る欧米人が盛に用いて居るのを我等が用い能わぬと云うのは寧ろ技術上の²⁶怯懦である。

²⁴ 「13箇」を「13個」とした。

²⁵ 「世界的大速法」を「世界的大速記法」とした。

²⁶ 「キョウダ」と読み「おくびょう」の意味。

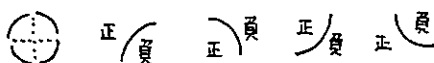
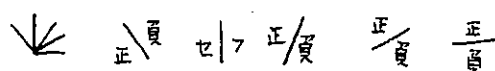
10. 以上の基本線を第壹種、第貳種、第參種、第四種に分ける 是は線の長短に依るのである。普通 第二種線は長さ約一分五厘、第三種線は第二種線の二倍 即約三分、第四種線は第三種線の二倍 即 約五分、壹種線は第貳種線の約半分 即 約五厘である

11. 線の正側 及 負側

線の両側を正側 負側と區別する 即

正側 (左側 及 上)

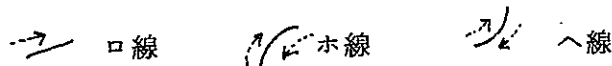
負側 (右側 及 下)



12. 線の引方

基本線中、口線、ホ線、へ線は特殊の書き方を為す。

即 口線は下より上へ、ホ、へ両線は上より下 又は下より上へ書き得 (但炭線に限る)。下図を見よ



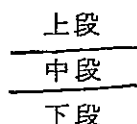
他は総て左より右へ、又は上より下へ書く。



13. 上中下段

位置を三段に分けて上段、中段、下段とする。

即ち線と線との間を中段とし上線以上を上段 下線以下を下段と定める。



14. 五十音図配定表

	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列	
ア行	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ア行は 皆下かへ 書く
カ行	一	ノ	ノ	ノ	一	
サ行	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	
タ行	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	フとツ は下かへ 書く
ナ行	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	
ハ行	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	
マ行	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ヤ行、 ラ行は 上からか 下へか く
ヤ行	ノ		ノ		ノ	
ラ行	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	
ワ行	ノ		ノ		ノ	

注意「ン」無し

15. 注意 ヤ、ヨ、ラ、ル、ロを独立して書く時は正側に「ノ」

なる標を付す。例を見よ。無論連綴の場合は不要。

ヤ ヨ シラ ル ロ

16. 14の表はア行は左から アイウエオ、カ行はカキク
ケコ等と読む可し。

17. 五十音図配定規則

ア列（アカサタナハマヤラワ） オ列（オコソトノホモヨロ）

1. ア列はオ列と同形異長 即 ア列の二倍＝オ列

2. イ列はエ列と同形異長 即 イ列の二倍＝エ列

3. ウ列はオ列と同長異形 即 ウ列＝オ列＋正側点

ウ列はオ列の正側に点を打つ 但し中央部。但 フクツ

（不屈）は例外である。「フクツ」を能く留意せよ。

例 「カ」ノ二倍＝コ
「キ」ノ二倍＝ケ
「サ」ノ2倍＝「ソ」
「シ」ノ2倍＝「セ」
「ソ」ノ正側加点＝ス

18. 前述の五十音図は種々考究の結果配定したものであつて 拙式の綴字体が最もピットマン式に近似するを得たるは些か余の誇りとする所である。無論余はピットマン式の如き順流なる字体に²⁷近く為す為殆んど十数回 五十音図配定を変じ改めたのだ。今五十音図各字間の関係規則を述べたが 夫れに依ると ア列 及 イ列の各字を覚え込んだならば 残りのウ列、エ列、オ列は皆 規則に依つて考え出す事が出来る（但フクツを除く）。従て諸君はア列 及 イ列の十八字と「フクツ」²⁷ 丈けを能く覚えたら宜しいのである。結局 2/ 字丈けの書方を繰返して呑み込まなくてはならぬ。
19. 五十音図の各字を夫々新しい仮名だと考えて 即ち角う云う新文字を覚えるのだ。何にせよ新文字で有るから一寸覚え悪く 又覚えて居ても急に頭から出悪いかも知れぬが 夫等の苦痛は一週間も練習すれば直る。又此五十音字は速記術の大骨子であるから 充分に²⁸スラスラ書き綴り得る様にならなくては不可ない。

27. 「近く為め」を「近く為す為」とした。

28. 「スラ く」を「スラスラ」とした。

20 五十音図は次の様にして覚えても宜しい。

ア行	ア	イ	ウ	エ	オ
カ行	カ	キ	ク	ケ	コ
サ行	サ	シ	ス	セ	ソ
タ行	タ	チ	ツ	テ	ト
ナ行	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ行	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ行	マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ行	ヤ	リ	ル	レ	ロ
ラ	ラ				
ワ	ワ				

(中根正親 創案 五十音字解法)

△練習第一

1. 次の字を読め

イー (ー) \ (ー) | (ー) (ー) \ (ー) (ー) (ー)
 ロ (ー) (ー) \ (ー) (ー) (ー) (ー) (ー) (ー)
 ハ (ー) (ー) (ー) (ー) \ (ー) | (ー) \ (ー) (ー) (ー)
 ニ (ー) (ー) (ー) (ー) \ (ー) (ー) (ー) (ー) (ー) (ー)
 ホ (ー) \ (ー) (ー) (ー) | (ー) (ー) (ー) (ー) (ー) (ー)
 ヘ | (ー) (ー) (ー) \ (ー) (ー) (ー) (ー) (ー) (ー)
 ト (ー) \ (ー) (ー) (ー) \ (ー) (ー) (ー) (ー) (ー) (ー)
 チ (ー) (ー) (ー) (ー) \ (ー) (ー) (ー) (ー) (ー) (ー)

2. 次の字を書いて御覧なさい。

イ、キ サ ハ ミ ヤ ナ ク シ ト ヒ フ ネ ツ

ロ。ノ ム ケ ア ヤ ラ ス ヘ モ ト ヌ オ
ハ。ユ リ コ ヨ ヒ フ レ エ ウ テ タ サ
ニ。ニ セ チ カ ミ ホ イ ネ シ ハ ツ メ

2/. 五十音連綴

総ての音字を連綴する時には 前者の末尾より筆端を起すのである。即 前の音字が書き終った処から其儘次の字に移るのである。而して是等 普通文字は皆 中段に書くのである。下の例を見よ。

例

秋 (アキ)	イ	冬	イ	稻	ハ
時	ハ	紙	ハ	石	ハ
綱	ハ	力	ハ	小石	ハ
梨	ハ	声	ハ		
国	ハ	餅	ハ	河	ハ
宝	ハ	刀	ハ	南	ハ
机	ハ	着物	ハ	娘	ハ
骨	ハ	煙	ハ	知己	ハ
橋	ハ	鉄	ハ	金持	ハ
腰	ハ	頭	ハ	舌	ハ
柿	ハ	基礎	ハ	耳	ハ
櫛	ハ	光	ハ	鹿	ハ
あなた	ハ	浅間山	ハ	怨	ハ
				英国	ハ

注意

柿 = カキ を書く場合に 先づ「カ」の線を左から右へ引き 次に「キ」の字を続けて書く。

フ (不正) フ (不正) フ (正) フ (不正)

22 普通線はすべて中段に書く事は2/ 節で述べたが 夫は次の様に細かに述べられる。

甲. 総ての斜線 及 直立線 即「ノ (/ (() \ | / 」が先頭にある時 夫等は中段の内に書かねばならぬ。但し「ツ及フ」線 即 — は横線とす。

例 袖 瀬戸 竹 中段
敵 鉾 雨

乙. イ. 総ての横線 即ち — へ — が単独にある場合 又は横線の次に横線が来る場合 又は横線の次に下向斜線 及 直立線が在る時は 中段上部より書き始める。次の例は其等の一々の例。

例. 柿 泣き 増し 月
仮名 鴨 孤 鋼
名 香 粉 眼

ロ. 横線の次に上向斜線が連なる場合には中段の下部から書く。

例. 苗 声 前

注意. 22 の規則は一見甚だ面倒の様だけれどもピットマン式でやって居るのであるから是非従わねばあとで非常に損を受ける。

23 同方向の直線が二つ 或は二つ以上重なる時には継ぎ目の処で其線の負側 (右側或は下側) に小さい²⁹ 円輪を付け 両線の間を離さない様にする。但し直線 「— \ | / —」に限る。

29. 「小い」を「小さい」とした。

例 此処 過去 愚痴 とお 聞き
 つつ 只 フフ 出て 父
 何々 効め たとえ 不服

△練習 2

I. 次のものを読め

- 1.
- 2.
- 3.
- 4.
- 5.

II. 次のものを書け

1. 的 (マト) 船 肩 墨 斧 (オノ) 橋 霜 雪 春
2. 玉 紙 石 布 炭 爪 足 波 敵 寺
3. 浜 牛 馬 庭 域 村 蓋 (フタ) 松 羊 滝
4. 酒 家 鳥 服 腹 雪 房 関 (セキ) 肉 米
5. 庫 金 (カネ) 梅 桃 皮 赤 白 青 黒 桶

△練習 8

I 次のものを読め

- 1.
- 2.

II 次のものを読め

- 1.
- 2.

第二章 濁音 及 半濁音

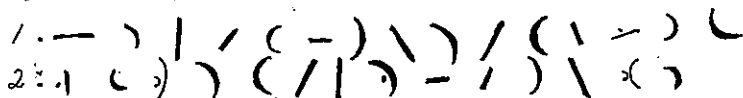
24 濁音を表わすには其清音文字の淡線を濃線とする。

し「フクツ（不屈）」は例外である 即ち「フクツ」は正側中部に痰小点を加う。半濁音は正側へ「ゝ」を付ける。

例	カ行清音	一	/	丨	/	—	カキクケコ
	カ行濁音	一	/	丨	/	—	ガギグゲゴ
	サ行清音	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	サシスセソ
	サ行濁音	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ザジズゼゾ
	タ行清音	ㄣ	丨	ㄣ	丨	ㄣ	タチツテト
	タ行濁音	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ダヂヅデド
	ハ行清音	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ハヒフヘホ
	ハ行濁音	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	バビブベボ
	ハ行半濁音	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	パピプペポ

△練習 4 (練習は添削して上げる)

I. 次のものを読め



注意 濃線は上の例の様に太く書くのではない ホンの
すこし濃く成れば善い。極く僅かペンを抑うれば
書ける。謄写では判り悪いので殊更太く書くのである。

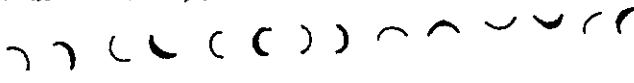
II. 次の例を書け

1. ど じ ご ば で た が す べ ざ げ ぞ ど
2. べ ぜ ふ ぐ び た ぼ ざ で し ぼ ぜ た
3. が ば ど じ げ で ざ ふ ぜ こ ぞ べ ふ ぐ

△練習 5

例. 自己	餓鬼	次	罰
怪我	井戸	柴	風
萬	水	伯父	火事
坪	何処	門司	肘
野次	門	程	是非
どなた	火鉢	飾り	下田
菊面	いちり	湯殿	柴田
拳	手紙	麦粉	左
琵琶湖	相模	ゴリラ	鯨

注意 曲線の濃線は其線の中央部丈けを太くする。

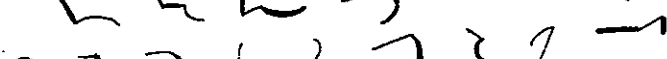
即ち 

上の如く三日月形にならねば不可ぬ。(然し是等濃
曲線の前に濃直線が在るときは曲線の先頭が
一番大きくなる。) 下の例を注意せよ。

例 菓子 家事 賀辞

I 次の例を読め

1. 

2. 

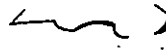
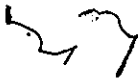
3. 

II 次の例を記せよ

- 虹 筋 鍵 (カギ) 髯 喉 (ノド) 馬廐 (ロバ) 座敷
- 肥後 籠 後家 玉 野田 耻 幅 雉
- 土手 屑屋 まぜる 東 波止場 しらが 駄目

25 父字連綴は余り上下に長くなっては不可ぬ 即 直立
 第三種の三倍を限りと極めて置く。も些し委敷云えば
 中段の上下約二段倍迄は書いて好い。夫以上に非
 常に上下に長くなる時には残部を切り放して 又中段か
 ら書き始める。但其時続け結ぶ可き文字は其前の語
 尾に極く接近させて連続語なる事を表わす様にする。

例

聞しめしたり		(不正)		(正)
楠 正成		(不正)		(正)
ラリルレロ		(不正)		
サシスセソ		(不正)		

注意 直接に連続させ

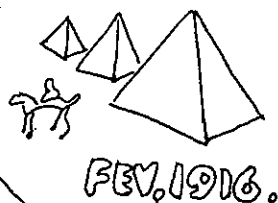
なければならぬものを放して書く時は必ず間隔を
 縮めて書 即 ラリルレロ、サシスセソの例の通り、
 併直接に連続させずとも分るものは接近させて
 書く必要はないのである 上例、楠正成の如し。

(以上 巻一終り)

TUN

通信教授

NAKANE'S
SYSTEM OF JA-
PANESE SHORTHAND
中根式
日本語速記法



日本語速記中根式

NO 2

□ 第三章 長拗音

26. 長音 (清濁音及半濁音の長音)

長音と云うのは五十音各行の音を長く延いて発する音を云う。仮令えば「カー、キー、クー、ケー、コー」。

然るに漢字の音として表わるるものは只ウ列とオ列のみである。従ってウ列、オ列の長音は特に単縮する必要が有る。清濁音及半濁音の長音に就いて

「漢字の音の長音はウ列及オ列に限る」とは余の創見で有る。

27. 拗音

通常音 (五十音) を少し曲げて発音すると拗音になる。

譬えば「サシスセン」が「シャ シュ シェ ショ」となる。処で漢字の音で拗音であるものはア列、イ列エ列で以て表わす事が出来ます。即ち漢字の拗音は三種です。是は他式でも角うやって居る。

28. 漢字の音に現われる長音及拗音の書方

26、27 に於て述べた通り長音は二列、拗音は三列合計五列であるから各列とも生かすことが出来る。

即ち各行の各本画の頭部正側に大鉤を付けて漢字に現わるる長音及拗音を表わす事とする。そうして是等の内ウ段及オ段は長音に読み残りは拗音に読むのである。

29. 次に拗音を総て書いて見よう (但し拗音にも

長音と短音とがあるが、この内には漢字に無いものを含む)

加行拗音	キヤ	キユ	キヨ
	ギヤ	ギユ	ギヨ
	クワ		
佐行拗音	シャ	シュ	ショ
	ジャ	ジュ	ジョ
多行拗音	チャ	チュ	チョ
	ジャ	ジュ	ジョ
奈行拗音	ニヤ	ニユ	ニヨ
波行拗音	ヒヤ	ヒユ	ヒヨ
	ビヤ	ビユ	ビヨ
	ピヤ	ピユ	ピヨ
磨行拗音	ミヤ	ミユ	ミヨ
良行拗音	リヤ	リユ	リヨ

以上の表に於て「ヤ」が付いて居る列を拗音第一段
 其次の「エ」が付く部分を拗音第二段、最後の「ヨ」
 が付く部分を拗音第三段と名付けて置く。

30. 総て拗音第一段は「ア」列で表わし第二段は「イ」列、
 第三段は「エ列」の本画で表わす。

漢字の音に無い拗音は他の拗音に比べて軽く見て
 宜いのである。(因に当て字を用うるならば漢字で
 総ての拗音を表わす事が出来る)

30の説明に依って明かなる如く、拗音を書く場
 合には先づ其語尾が「ヤ」であるか「ユ」であるか「ヨ」
 であるかを見る。併して「ヤ」即 拗音第一段であれば

其行のア列本画の頭部正側（曲線ならば内側）に大鉤を付くれば宜い。

例、シャと云う拗音を書くには第一に「シャ」は佐行拗音であると考え、次に「ヤ」があるから拗音第一段 即ア列である事が分る。従つて「ㄣ」と書くのである。記憶に便利なのは次の様な解方である。

31. 長音 及 拗音の別解

（イ）各本画の頭部正側（曲線ならば内側）に大鉤を付したものは仮りに其音の長音を表わすと考える。
例えば —カ○ / キ○ | ク○ / ケ○ —コ○

ㄣカー ㄣキー ㄣクー / ケー ㄣコー

（ロ）上の場合に五つの長音の内、漢字の音として用いられるのはウ段の「クー」及 オ段の「コー」と二つ丈で、残りの「カー」「キー」「ケー」と云う音は特別の場合の当て字以外に漢字がない。

其処で「カー」をば「キャ」と読み「キー」をば「キュー」と読み「ケー」をば「キョー」と読む事にする。

即ち言い替うれば「キャ」と云う拗音は「カー」と書いて書いて表わし「キュー」は「キー」、「キョー」は「ケー」と書くと覚えるが宜い。

佐行 多行其他の拗音も同様に考えよ。

32. 拗音の長音と短音

イ. 拗音第一段（即ヤを有するもの）は単音とす。是を長音にするには「ア」を付記す可し。

例 シャ ㇏ シャー = シャア ㇏
 チャ ㇏ チャー = チャア ㇏
 ニャ ㇏ ニャー = ニャア ㇏

ロ. 正側頭部（曲線は内側）に大鉤を付して表
 わされる所の拗音第二段（ユ）及同第三段（ヨ）
 は皆拗音の長音を表わすものとする。

若し是等の拗音が短音を表わす場合ならば頭部
 大鉤の中に淡小点を打つ。是を短音標と名づく。

例 シュー ㇏ ショー ㇏ （拗音の長音）
 ジュー ㇏ ジョー ㇏
 ミュー ㇏ ミョー ㇏ （拗音の長音）
 ミュ ㇏ ミョ ㇏ （拗音の短音）

33. ア列 イ列 エ列の普通長音

1. ア列

ア列の長音を作るには「ア」を付記す。

例 カー = カア ㇏ サー = サア = ㇏
 マー = マア ㇏ ヤー = ヤア = ㇏
 ハー = ハア ㇏ ナー = ナア ㇏
 ター = タア ㇏ ラー = ラア ㇏
 バー = バア ㇏ ザー = ザア ㇏

2. イ列

イ列の長音を作るには「イ」を添ゆる。

キー = キイ ㇏ シイ = シー = ㇏
 ヒー = ヒイ ㇏ ニイ = ニー = ㇏

チー=チイ ✓ ミー=ミイ ✓
 リー=リイ ✓ ビー=ビイ ✓

3 エ列

エ列の長音を作るには末尾に「エ」を付す。

例 セー=セエ ✓ ケー=ケエ ✓
 テー=テエ ✓ ネエ=ネー ✓
 へー=へエ ✓ メー=メエ ✓

34. 長拗音総括表

1. ア行

拗音なし

ウー オー

2. カ行

拗音	長	キャ (カ)	ケー (キ)	キョー (ク)	キア	ケー	キョー
		カ	キ	ク	カ	キ	ク
	単	カ	キ	ク	カ	キ	ク
	カ	キ	ク	カ	キ	ク	
長音	カ	キ	ク	カ	キ	ク	
濁音	カ	キ	ク	カ	キ	ク	

3. サ行

拗音	長	シャ	シュ	ショ	濁	シャ	シュ	ショ
	シャ (シ)	シュ (シ)	ショ (セ)	シャ	シュ	ショ		
単	シャ	シュ	ショ	特定	シャ	シュ	ショ	
長音	スー	ソー	ズー	ゾー				

4. タ行

拗 { 長 チャ- (タ-ア) チュ- (チ-) } 濁 ヌ ヌ ヌ
 短 チャ チュ チョ ヌ ヌ ヌ
 長音 ツー トー 濁 ズー ズー ドー

5. ナ行

拗 { 長 ニャ- (ナ-ア) ニュ- ニョ-
 短 ニャ ニュ ニョ
 長音 ヌー ノー

6. ハ行

拗 { 長 ヒャ- (ハ-ア) ヒュ- (ヒ-) ヒョ- (ヘ-) } 濁 ヌ ヌ ヌ
 短 ヒャ ヒュ ヒョ ヌ ヌ ヌ
 長 ヒャー ヒュー ヒョー
 短 ヒャー ヒュー ヒョー
 長音 フー ホー
 プー ポー 濁 プー ポー

7. マ行

拗 { 長 ミャ- (マ-ア) ミュ- (ミ-) ミョ- (メ-)
 短 ミャ ミュ ミョ
 長音 ムー モー

8. ヤ行

拗音なし

長音

ユー ヨー

9. ラ行

拗音 { 長 リャ- (ラ-ヲ) リュ- (リ-ヲ) リョ- (レ-ヲ)
短 リャ リュ リョ
長音 ルー ルー ロー

10. ワ行

拗音 長音なし

35. 長拗音連綴

1. 長拗音と他の清濁音 半濁音との連綴

2. 長拗音と長拗音との連綴

両者とも34. の表に挙げた様な形の儘連綴させる事が出来る。

例 カ行

気候	飛行機	高価
光輝	帰郷	帰居
急使	至急	野球
京都	狂歌	飛脚
華美	起臥	汽車

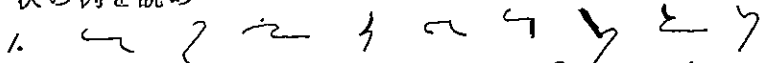
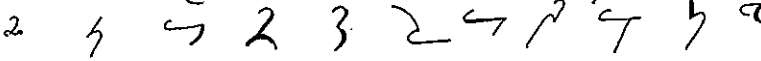
注意

起臥、汽車の例の如く鉤が半分しか書けない場合がある。是は半鉤と云うて大鉤と同様に取扱われて居る。

公共	強硬	空虚
挙行	機業家	支局

△練習 6

I. 次の例を読め

1. 
 2. 

II. 次のものを書け。

1. 講義 行儀 詩化 夜行 夜業 工業 死去

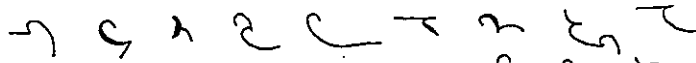
2. 知行 不幸 浮華 行幸 魔球 佳境 愚挙

例 サ行

釈迦		将校		総理		理想	
汽車		不肖		無双		乗馬	
酒気		書家		非常		予習	

△練習 7

I. 次の例を読め

1. 
 2. 

II. 次の例を書け。

1. 衣裳 場所 首尾 熱上 女子 恥辱 障子 悲壮

2. 承知 書記 飛車 車掌 上昇 事情 寄贈 樞議

例 タ行

無茶		忠義		町長		調子		通路	
未着		不注意		思潮		著		普通	
宇宙		躊躇		恰度		誇張		騰貴	

△練習 8

I. 次の例を読め

1. ㄣ ㄣ } ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ
2. ㄣ ㄣ ㄣ } ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ

I. 次の例を書け

1. 中尊 応答 罵倒 調理 市中 議長 通船 通史
2. ³⁰格○ 杜翁 調馬 勅語 党派 風姿 道路 長刀

例 ナ行

入費 ㄣ 尿 ㄣ 脳裏 ㄣ 無脳 ㄣ
若僧 ㄣ 未納 ㄣ 納付 ㄣ 効能 ㄣ

△練習 9

I. 次の例を訳せ

1. ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ
2. ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ

II. 次の例を書け

1. 予納 入場 豪農 吸入 囿 繞 使入 農相
2. 女房 入学 余儀無う 農業 知脳 能州

例 ハ行

百家 ㄣ 氷河 ㄣ 屏風 ㄣ 風紀 ㄣ
批評 ㄣ 方法 ㄣ 法医 ㄣ 希望 ㄣ
予防 ㄣ 法規 ㄣ 百姓 ㄣ 風土 ㄣ
潮少茫 ㄣ 五百 ㄣ 夫婦 ㄣ 美風 ㄣ

△練習 10

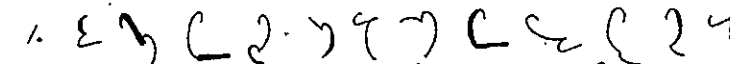
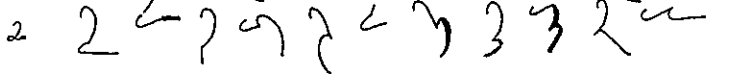
I. 次の例を読み書け

1. 方位 意表 ³²避病 未亡 講評 二像 投錨
2. 無法 白衣 喜望峰 風光 封筒 病気 商標

30 不明 3/ 「読書け」を「読み書け」とした

32 難読

II 次の例を読め

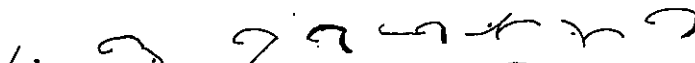
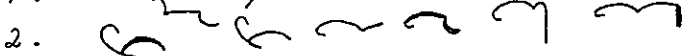
1. 
 2. 

例 マ行

気脈 仕舞う 奇妙 申し
 巧妙 構う 美妙 蒙古

△練習 //

I 次の例を読め

1. 
 2. 

II 次の例を書け

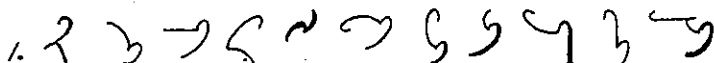
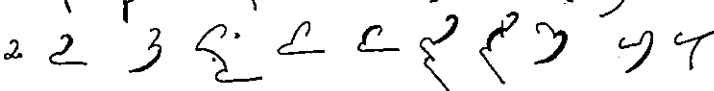
消耗 眉毛 猛虎 孔孟妄語 明後日 思う

例 ヤ行及ラ行

養子 用事 勇氣 略し 登竜
 佳良 老医 疲労 遼東 用途
 小姓用 老婆 寄留 思慮 旅行

△練習 /2

I 次の例を読め

1. 
 2. 

II 次の例を書け

1. 漁師 施療 老母 無用 私有 狡量 重要 明瞭
 2. 忠良 遣ろう 所有 顧慮 異様 左様
 3. 両洋 高棲 辛勞 猶予³³ 車両 獵銃 養老 嫌らう

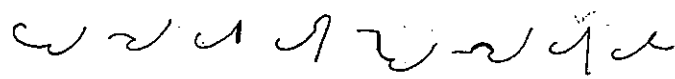
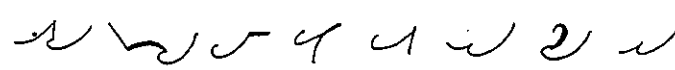
33 「車輛」を「車両」とした。

例 ア行

王家  杜翁  奥羽  周防 
 既往  応対  硫黄  霸王 

△練習 13

I 次のものを読み

1. 
 2. 

II 次のものを書け

1. 往古 近江 老姫 応じ 王候 右往左往
 2. 大村 王子 王道 応対 出逢う 仁王 食おう

36 外国音を書き表わすに要する特種拗音は 後章に於て述ぶる事とする。去り乍ら現在までの知識に依り夫等の拗音を不完全乍ら表わし得る筈である。

インツクキ法

37. 漢字の中、二音から成るものは逆記法で書くと述べて置いたが、此逆記法と云うのは読んで字の如く逆に書く方法である。即ち甲音の次に乙音を書かねばならぬ所を先づ乙音を書いて次に甲音を書く云う書方である。其方法は現に日本及西洋の諸式に用いられて居るのであって決して珍奇な書方とは云えない。併し余の「インツクキ」法なる規則其ものは日本に於て始めてである。此処に些か述べて置きたいのは邦語速記法中「ガントレット」氏創案「ガントレット」式に於て「チクシ」法なるものがある。余のインツク（チ）キ法中、チクなる二音は同氏の「チクシ」法の「チク」と一致する点である。是は兩者の研究が一致せる結果を見出したに過ぎない。無論ガントレット式中には余のインツク（チ）キ法なるものは無い。そして「ガントレット」式は明治三十四年に出来て居るのであるが少くとも余の研究方針なる章を一読せられたならば角く結論の一致である事が分るだろう。
- 尚以下に論ずるインツクキ法中 ツの書方は現在の諸式同様の型を取った事を明記して置く。
- 最も余の「インツクキ」法中で「イン」は残りの「ツクキ」に比べて数等優れた効果を示すものである。インツクキ法中の最重要物である事も注意して置きたい。
- 逆記と云う事に就いて是迄余りこの点を説明したもの

34 35 「次ぎに」を「次に」とした。36 「是迄」を「是迄」とした。

が無かったために色々の愚問を受ける事が多い。殊に驚くのは一人前の速記者にして多少批評眼を有す可き連中が無識にも不可能などと速断する事である。例えば 勢 = セイ  =  の如く勢なる漢字の音読みを書くのに  と書かないで  を簡略して  と書くのである。処が  と書けば発音順だが  と書けば順が変ってイセと成る。即ち頭部の大円輪は イ を示すのである。

処で対応する音が反対の順で表わされて居ると云う点丈けを見て「セイと云う音を聞いて自分の頭で夫れを反対に イセと考え改めて書く事は不可能である。即 逆記法は不可能である」と反対者が主張する。是が抑もの早合点である。未だ逆記法の真の書方を知らないものの言である。

實際 速記法に於て「セイ」と云う音を書き綴る場合には我々が セイ と云う音を聞いて姓、勢、性、^{*}精、清、静等の漢字の形を瞬間的に頭の中に想い浮べる事が出来ると同じく「セイ」と聞きて  なる新漢字を頭の中で思出して其形を書き綴るのである。従って心の中で イセ と考え改める必要も無く至って楽に大円輪³⁷を先に書く事が出来るのである。インツキ法の他のものも同様である。余の門人に就いて^{*}見るも未だ嘗て此点に苦しみたるものを知らない。是れは寧ろ当然の

※こう読んだ。

37 「先きに」を「先に」とした。

結果であつて誇るに足らぬ。³⁸尚、世界的速記法たる
 るピットマン式に於て 又近くば我がガントレット式 及
 武田式にて現に活用されつつある事を憶うたなら
 ば想半ばに過ぐるであらう。

逆記法は実に拙式の大眼目となれるものであるから
 特に逆記法の可能なる所以を叫んで置く訳である。

38. インツクキ法に於て用うる大小円輪、大小鉤、大小楕
 円輪等の書法に就て判別不可能を説くものが居
 るが、夫等は未だ練習不十分の実証である。夫等の人々
 は外国の諸式の様型を一覧せらるる様にお勧めする。
 尚、拙式にて用うる書方は世界の速記界で許され用
 いられて居る書方を採用した事を念の爲めに申して
 置きたい。従て書方の紛雜に就いての疑念は一掃
 せられよ。

39. 「イ」の書方

或音の次に³⁹「イ」が来る時には 音の本画頭字に
 大円輪を付す。但、曲線は内方、直線は正側。

例	菜	の	兵	の	無	い	の	対	の	= 隊
	帝	の	景	の	貝	の		鯉	= 恋	の
	悔	い	地	位	の	第	の	明	の	姪
	芸	の	雷	の	相	の		水	の	
	灰	の	税	の	買	い	の	問	い	(樋)
	財	の	例	の	追	い	の	泥	の	
	精	の	ツ	イ	の	概	の	売	の	

38 「尚ほ」を「尚」とした。39 「次ぎに」を「次
 に」とした。

以上の例は「イ」が第二番目にある場合である。若し「イ」が第三番目或は夫れ以下に有る場合は如何うするかと云うに是は第二番目にある時と同様に前音の頭部に大円輪を付けて表わすのである。

其時に注意すべきは「イ」なる音より第三番目の音を表わす所の本画が若し曲線であるならば円輪は必ずその曲線の内方に曲げて書かねばならぬ。

例	器械	キカイ	ル	子細	シサイ	ル
	競泳	キョーエイ	フ	秀才	シューサイ	ル
	見たい	ミタイ	ア	為たい	シタイ	ル
	偉大	イダイ	ア	緋鯉	ヒゴイ	ル
	芝居	シバイ	フ	使	ツカイ	ル
	高い	タカイ	ト	低い	ヒクイ	フ
	遅い	オソイ	フ	早い	ハヤイ	フ
	仕舞	シマイ	ル	交代	コータイ	ル
	名声	メイセイ	ル	改正	カウセイ	ル
	開会	カイカイ	ル	再々	サイサイ	ル
	到底	トウテイ	ル	抵抗	テイコウ	ル
	作りたい	ソウタイ	ル	握りたい	グタイ	ル
	宜しい	イシイ	ル	嬉しい	ウレシイ	ル
	可笑しい	ウケシイ	ル			
40	法廷	ホフテイ	ル	形勢	ケイセイ	ル
	政体	セイテイ	ル	生命	セイメイ	ル
	愉快	ユクタイ	ル	生涯	セイゲイ	ル
	招待	ショウタイ	ル	市会	シカイ	ル
				世界	セイカイ	ル
				御招待	ゴショウタイ	ル
				輜重兵	ソチュウヘイ	ル

40「法庭」を「法廷」とした。

III 次の例を書け

1. 細工、内務、大工、製紙、代償、題し、命じ、乃至
2. 精気、大鼓、台場、廃し、債鬼、会期、停止、財布
3. 古矢、市制、未製、記載、怪しい、乏しい、悲しい
4. 未定、死刑、家庭、被害、肥大、苦い、甘い、思い
5. 調停、公平、証明、高低、宮廷、芳名、養成、為政家
6. 再興、閉口、内相、逕相、輕重、愛嬌、西京、慶応
7. 採配、精靈、税制、売名、体裁、明快、頽廢
8. 会い度い、精米、海兵、拐帶、毎会、形態、平明

37. 「ン」の書方

「ン」を持って居る音はすべて 本画の頭部に小円輪を付して「ン」を表わさしめる。注意は「イ」の場合と同じ。「ン」が第二音目にあると第三音目にあると第三音目以下にあるとを問わず すべて「ン」を含み従えて居る音の書方である。無論38の「イ」の場合も「イ」が第二音目に、或は第三音に、或は夫れ以下にあっては書方は同然であつた。

尚逆流の書方を許さない訳は是を許せば字体が非常に崩れ易くなる為め翻訳上の差障となる事が甚だしいからである。日本の多くの式では此危険な逆流書法をば平気で用いて居る。然し同じ逆流でも独立楕円輪だけは許して差支えないものとせられて居るが、他の直屬大小円輪、鉤、楕円輪は或る特別の例外の外 逆流書法を許されない。

例艦 = カン 拳 = ケン / 印 = イン 乱 = ラン

産 = サン 面 = メン 難 = ナン 仁 = ジン

善 麥 損 天 犯 品
千 本 今 門 段 噸
金 君 沈 単 ッン 年
残 臣 倫 腕 分 寸
本屋 免訴 人家 寒氣 喧嘩
禮家 千家 根氣 寸志 天下
半紙 変化 蜻蛉 番地 辛苦
参加 人馬 戦利 吞氣
自慢 非番 済まん ならん 云わん
士官 時間 お産 異論 議論
野心 四千 お損 をへん 麒麟
戦争 変更 深更 感動
大層 可愛想 幻想
心痛 楠公 品評 乱暴
壮快 現状態 同心 斤量
明年 流産 光線 奉天
新鮮 判断 審判 相談
残念 新婚 散々 人間
漸新 頻繁 參觀 晚餐
全員 身心 本件 金銀
恩典 天覧 戦座 乱倫
寛厳 軍艦 今般 森林
屯田

今回		心配		憲政	
再三		関係		神聖	
		財産		歓迎	
尊敬		丹誠		日本海	
運動会		海軍		身代	
米人		台湾		逋信省	
大臣		全体		反对派	
精神		先生		大麥	
親類		音声		万歳	

△練習 15

I 次の例を読め

1.               
2.               
3.               
4.               
5.               
6.               
7.               
8.               
9.               
10.               
11.               
12.               
13.               

II 次の例を書け

1. サン、エン、デン、グン、ダン、ベン、ジン、ロン、イン
2. ゼン、フン、ゴン、マン、アン、ナン、バン、ゲン、ペン
3. 戦地、門戸、貧苦、讒譖、紳士、元気、本場、転婆
4. 年期、繁華、犬馬、根気、天地、人夫、穩和、進歩
5. 如何、事件、留守番、地面、期限、鬼神、疑問、杜撰
6. 波瀾、治乱、迂散、いけん、要らん、詰らん、派遣、不審
7. 多分、充分、教壇、愁嘆、脳神経、方面、揺籃
8. 扇風器、軍港地、免許状、金光教、安奉線、本番
9. 今般、大臣、肝心、信玄、電信、全権、面談
10. 先見、三文、困難、本店、寒村、新聞、丹田、懇願
11. 開進、製産、参詣、面会、尊敬、軍隊、敕命
12. 征韓、仁政、参政官、精神、対面、水仙

40. 「ク」の書方

或音が「ク」と云う音を其次に持つ時には、総て頭部に小鉤を付ける。注意事項は前と全く同様である。鉤形に於ては特に曲線の逆流を避けねばならぬ。之は最も書き悪い為めである。

例 サク ㄣ (正) サク ㄣ (不正)
 ボク) (正) ボク) (不正)

重ねて云うが、総円輪、鉤、楕円輪等は直線の正側若くは曲線の内方に書く。此時直線の負側は、他の規則に充用するのである。是は後で章を改めて講述する事にする。

昨夜	白眉	徳義
八雲	悪み	国語
帰宅	規則	不覚
私塾	記録	晩く
高く	低く	早く
獲得	得策	速刻
北陸	約束	避く可く
北上	陸相	黙考
測量	泣く様	拍手
総督	項目	定約
牛肉	報告	漂泊
会則	贅六	開拓
性格	計画	売国
博覧	昨年	幾辺
先刻	英国	産額
親属	船舶	転宅

1. $\gamma \gamma \rightarrow \gamma \gamma \rightarrow \gamma \gamma \rightarrow \gamma \gamma \rightarrow \gamma \gamma$
2. $\gamma \gamma \rightarrow \gamma \gamma \rightarrow \gamma \gamma \rightarrow \gamma \gamma \rightarrow \gamma \gamma$

- 3.
- 4.
- 5.
- 6.
- 7.
- 8.
- 9.
- 10.

II 次の例を書け

1. ガク、バク、セク、モク、トク、ボク、ジク、ゴク
 2. ブク、ラク、ニク、ナク、チク、ダク、ムク、ロク
 3. 役目、盲、欠伸、仕組、送り、副使、学資
 4. 六部、神楽（カクラ）、袋、欲目、野口、菊地
 5. 視学、気楽、黄く、青く、白く船蔵、威嚇
 6. 素朴、貴族、安く、近く、寿ぐ、目出度く、囁く
 7. 同格、城郭、報国、風速、両国、妙薬
 8. 白銅、毒酒、続行、浴場、国風、服装
 9. 監督、南北、陸前、陥落、材木、混濁、
 10. 督促、万億、会則、厳格、塊、魄、紅白
 11. 革命、昨夜来、熟読、お作さん、お徳さん
41. グ及ズ、ギは「ク ツ キ」と考え インツクキ法に依り
簡略する事が出来る 上の例 神楽（カクラ）を「カクラ」
と書く様なものである。
ねぐら=ねくら かづら=かつら

42. 次にツ チ キに就いては其等が夫々 第二音目に
ある場合と第三音目 或は夫れ以下にある場合と
二つの書方をするのである。

43. 「ツ」の書方

(イ) 「ツ」が詰音 即或音と或音との間に短い音の「ツ」
を挿む場合 仮令えば「カップ」「リップ」等の場合に
は前者の線と後者の線とを相互いに交錯させ
る 但し前線の半分以下の所と後者の前半以内
で切り結ばせねばならぬ。

例

立派		屹度		待った	
知った		掘った		切尖	
専ら		ふっくら		厄介	

若し同方向の直線である為め交差が出来ない
時には 後者をば前線の負則に重ねる様にして
して 平行に書くのである。

例

国家		只った		ふっふ	
ちっち		くつく		とっと	
国庫		学校		きつけ	

又 ア行及ヤ行に就いて考うるに 何れの場合に
しても前線の末尾の処で後線と交わる様に
すれば其交点の位置に依って ア行か 又はヤ
行 或はウ行なるかが分るのである。勿論如何なる
場合でも線の語尾に於て交差すると考えて書けば
此注意は不要になる訳である。

例 呀と 入 夫 入 えっと 入
一致 イ 天晴 フ おっとり 入
遣った 入 寄った 入 悠っくり フ
余っ程 入 矢っ張り フ 拉薩 入

(ロ) ツが通常音なる場合

其場合に二つの場合がある。

(1) ツが第二音目にある場合

(2) ツが第三音目、或は夫れ以下にある場合

(1) の場合には本画の頭部（曲線ならば内方 直線ならば正側）に小楕円輪を付ける。

例

且 カツ 一 骨=コツ 一 冊=サツ 一
決=ケツ フ 仏=フツ 一 罰=バツ 一

楕円の大きさは第二種線の半分 即一分五厘の半分位でよし。

例

昇ぐ 一 (或は 一) 仏弟子 一
勝田 一 松田 一 つつじ 一
活動 一 薩摩 一 初午 一
鉄条網 一 結合 一 卒業 一

(2) の場合には「ツ」を帯ぶる本線をば前線から離して書く。

例

奇抜 一 奇傑 一 胃活 一
四月 一 美術 一 故実 一
鑄鉄 一 侮蔑 一 死没 一

前列

44 「チ」の書方

(イ) チが第二音目にある時は「ン」がある時の如く
頭部に小円輪を付ける 但し先端を些し外
方へ出して置く。

例

町 餅 口 鉢
余地 東風 勝栗 吝ち
裁ち物 無知 此方

(ロ) 第三音以下に「チ」がある時には「ン」の小円輪
を書き 正側の方に円輪に近き所に小点を打つ。

例

樋口 小町 香月町
気持 秀吉 啣ち

△練習 18

I 次の例を読

1. 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10.
2. 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10.
3. 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10.

II 次の例を書け

1. 吉、世知、勝ち、朽ち、待ち、雅致、素地
2. 毎日、ともどち、質屋、くちなわ、放ち、忽ち

45. 「キ」の書方

「チ」の場合と同じ 只 チの場合の小円輪の代りに
大円輪を用うる事とする。

例

書き 席 劇 敵 時
めき 歴史 益 先

浮き ㄨ 壁 ㄨ 溺 ㄨ 関所 ㄨ
 奇跡 ㄨ 喜劇 ㄨ 無敵 ㄨ 耽溺 ㄨ
 霹靂 ㄨ 春めき ㄨ 榮書き ㄨ 耳搔き ㄨ

△練習 18

I 次の例を読め

1. ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ
 2. ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

II 次の例を書け

1. テキ、ハキ、クキ、シキ、ムキ、セキ、ダキ、デキ、ジキ
2. リキシ、浮世、紡績、大敵、剣先、鋤焼、赤壁

46. 加点インツクキ法

39より45迄にて「インツクキ」逆記法を述べたが 拗
 音 長音 其他に対し加点（或 加線）を以てインツク
 キを添加する必要が起る。是等の加点加線を
 総称して加点と称する事とする。然して加点は総て
 本面の負側中央に添えて書くのである。

1. 「イ」は第一種直線を平行に書く

例. カイ ケイ ベイ セイ

「ン」は淡小点。

例

カイン ㄨ ケン ㄨ ベン ㄨ セン ㄨ
 シュン ㄨ チョーㄨン ㄨ ショーㄨン ㄨ ポーㄨン ㄨ
 ローㄨン ソーㄨン ㄨ ジュㄨン ㄨ ミㄨン ㄨ
 チャンコロ (支那人) ㄨ ポーㄨン ㄨ
 ジャンケン ㄨ ジュㄨンサ (巡査) ㄨ

3. 「ツ」は第一種直線を本画線に直角に引く

例 カツ  ケツ  ベツ  セツ 
出 (シュツ)  or  チュツ  or 

4. 「ク」は第一種曲線を底を線に向けて書く

例 カク  ケク  ベク  セク 
シャク  リャク  チャク 

或は シャク  リャク  チャク  と
書いてもよろし

5. 「キ」は「カ」の逆

例 カキ  ケキ  ベキ  セキ 

47. 46 の内「ン」は特に注意して置く必要がある 即
シュン、ジュン等は是非共この法に依って書か
ねばならぬ事が屢々起るのである。

48. 然 拗音及長音が「ン」を帯びる時には次の様
な略記法がある。則ち頭部大鉤の先端に「ン」
の小円輪を付ける。

例

シュン  ジュン  ション 
チャン  ジャン  ミャン 

是等が他の音字の次にある場合には次の
如く書く。但し或場合に不明瞭なる恐れある
時は加點法に依って之を補って置く様にする。

例

批准  旅順口  ツンテンシャン 
当春  バルーン  ポストポーン 
晩春  シャンペン  巡査 

| | | | | | |
|----|---|----|---|----|---|
| 竣工 |  | 春眠 |  | 準備 |  |
| 順当 |  | 俊秀 |  | 居 |  |
| 逡巡 |  | 純白 |  | 旬日 |  |

49. 拗音及長音が「ク」を帶有するときの略記法

此時は48 のソの時の如く書き 只大鉤を小鉤に改めるのである。

例

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 爵 |  | 食 |  | 局 |  | 百 |  |
| 脈 |  | 蒟 |  | 祝 |  | 着 |  |
| 客 |  | 力 |  | 略 |  | 弱 |  |

他音の次に連続する例

| | | | | | |
|----|---|----|---|----|---|
| 孔雀 |  | 腐食 |  | 五百 |  |
| 山脈 |  | 奉祝 |  | 威力 |  |
| 帰着 |  | 旅客 |  | 進略 |  |
| 蒟蒻 |  | 痼癩 |  | 天職 |  |
| 寄食 |  | 撞着 |  | 奉職 |  |
| 解釈 |  | 膽力 |  | 屈辱 |  |

他音の前にある時の例

| | | | | | |
|----|---|--------|---|----|---|
| 爵位 |  | 職務 |  | 緑衣 |  |
| 着御 |  | (正) 釈放 |  | 百姓 |  |
| 若僧 |  | 略取 |  | 脈搏 |  |

50 注意 上の場合は円は楕円形に 即 渦巻形

にして差支なし 然し鉤の大小は厳密に区

別して書かなければならぬ。寸し廊大して書け

ば  の様な形に成れば宜しい。

51. 拗音及長音が「ツ」を帶有する時の略記法

1. 拗音及長音が「ツ」を帶有して或語の先頭にある時には 大鈎の中に楕円輪を付し些か外方に開かしめる。換言すれば独立楕円輪を先頭に付けるのである。以下の例を注意せよ。

例 出=シュツ シャツ 襯衣
術=ジュツ チュツ

2. 上に述べた拗音及長音が語の中間以下にある場合には 43 節 (ロ) の (2) の書方に依る。

例 奇術 輸出 美術
派出所 槍術者

52. 拗音及長音が「ン」「ク」「ツ」を帶有する時の総例

| | | | |
|-----|-----|-----|-------|
| ン | 春霞 | 準行 | ジョー・ン |
| | 巡警 | 帰順 | 暮春 |
| | 認可順 | 一瞬 | クシャン |
| 「ク」 | 非職 | 祝奉 | 新宿 |
| | 勅諭 | 詔勅 | 武力 |
| | 蜀山人 | 苛責 | 古色 |
| 「ツ」 | 着順 | 出馬 | 柔術 |
| | 忘失 | 失題 | 技術 |
| | 植林術 | 奉職順 | 巡回力 |
| 爵位順 | (否) | (正) | 発着順 |
| 客順 | 脚色力 | | 純直 |
| 極力 | 潤色 | | |

53. 長拗音の次に来る「ツ ク」は — 1 と書いても
宜しい。或は「ン」と同様に加点法に依るも可 併
し成可く略記法に依る法がよい。

例

| | | | | | |
|----|---|---|----|----|----|
| 祝意 | ツ | = | ツ | 出馬 | ツ |
| 嫡子 | ツ | | 奇術 | ツ | 芸術 |

△練習 20

I 次の例を読め

1. ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ
2. ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ
3. ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ
4. ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ
5. ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ
6. ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ
7. ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ

II 次の例を書け

1. 職、局、驛、ジャク、リョク、ヒョク、リャク
2. 旬、シュン、チョン、シャン、チュンギャン
3. 出、ジュツ、チュツ、シャツ
4. 進出、参酌、古色、美食、技術、釈放
5. 出品、瞬間、若年、拝借、局長、免職
6. 男爵、弾力、緑草、恥辱、借馬、俊次
7. 今昔、祝砲、略奪、省略、順路、三春
8. 講述、合力、逆襲、帰客、お客人、百人
9. 打擲、密着、術策、天爵、郡書記順

□ 第五章 仮名遣い

54. 厳格な立場から云えば速記文字の仮名遣いは普通文字の仮名遣いと同じ様にするのが至当であるかも知れない。併し記音と云う方から云えば仮名遣は無理な物と云わねばならぬ。従て速記では是等の仮名遣いなどは實際用いないのである。即ち「キ、ヒ、イ」は皆「イ」と書き「エ、ヘ、エ」は皆「エ」と書き「ワ、ハ」は総て「ワ」と書くのである。然し、ヅはツと書いても善い。仮令えば

水=ミヅ

=ミヅ 先づ=マヅ= 静か シツカ
=カヅラ 髪 尋ね 崩れ
手綱=タヅナ 沈め=シヅメ
小面= 馴く=ナヅク
コヅラ

ヂは総て「ジ」と書く事は前に述べた通りである。

例 帰える 喰い(クライ) 俵
植える 見える
仕かえ くら 鯨
恥(はぢ) くら

複画派では濁音をば加点で表わして居るものが多いが、夫等は実地上清音の儘にして濁音にしないで済ます事が多い。単画、折衷、両派に於ても濃線、淡線の区別を明確にする必要が有るに拘わらず、或場合には濁音の濃線を清音の淡線で表わす事を許し得ると云えるのである。

通信教授

NAMANE'S
SYSTEM OF JA-
PANESE SHORTHAND
中 根 式
日本語速記法



FEB. 1916.



京都速記学校.

第六章 助 詞

55. 既述の通り 無短縮文字+助詞=短縮字という
意味を判然と頭の中に入れて置かねばならない。
余は特に拙式の助詞が他式に比し絶秀なる
事を繰返し以て諸君の注意を呼びたいのである。
56. 助詞と云うのは他の言葉（或は語幹など）に添うて
其語の格を表わし 或は補意的連従の詞となる
ものを総称したものである。
57. 助詞「ノ」の書方

或言葉の次に助詞「ノ」を付けるには その語
の一番終りの本画の尾部負側（曲線ならば
内方）に大鉤を書く。

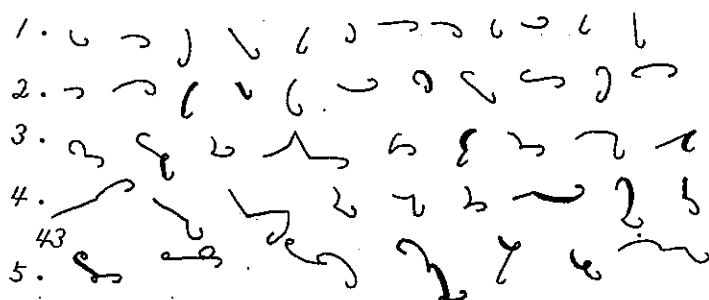
例

| | | | | | |
|--------|---|------|---|--------|--------------|
| 左の | ゝ | 火の | ゝ | 彼の(カノ) | → |
| 此の | → | 其の | ゝ | アノ | ノ(非) ~ (正) |
| 他の | ゝ | 身の | ゝ | 養(シ) | ~ (正) 〽 (不正) |
| 気の | ゝ | の | ゝ | 余の | ゝ |
| 機械の | ゝ | 床の | ゝ | 稲の | ゝ |
| 酒の | ゝ | 舌の | ゝ | 苔の | ゝ |
| 月の | ゝ | 馬鹿の | ゝ | 余所の | ゝ |
| 時計の | ゝ | 針の | ゝ | 先の | ゝ |
| 兄弟の | ゝ | 心の | ゝ | 中の | ゝ |
| 意志の | ゝ | 光の | ゝ | 歌の | ゝ |
| 陸軍の | ゝ | 飛行機の | ゝ | 練習の | ゝ |
| 其の頃の天気 | の | | | | |

(ここから第3巻)

△練習 2/

I 次の例を読



II 次の例を書け

1. 其の、身の、眼の、葉の、色の、久野の、紙の
2. 岡の、社の、庫の、鉄の、女の、筆の、須磨の
3. 世話の、墨の、孔子の、忠義の、軍旗の、刀の
4. 進歩の、夢の、罪の、土地の、材木の、汽車の
5. 年齢の、植民の、準備の、大坂の、京都の、東京の
6. 徴兵の、親戚の、高尚の、議員の、新聞の

58. 助詞「に」の書方

本画の末尾に小鉤を付けたものは「に」なる助詞を示すものとする。但し直線ならば負側 曲線ならば内方に付ける。即「ノ」の鉤の小なるものである。

例

| | | |
|----|----|----|
| 火に | かに | 眼に |
| 手に | 血に | 瀬に |
| 左に | 他に | 理に |
| 戸に | 腑に | 何に |
| 齒に | 氣に | 場に |
| 野に | もに | まに |

| | | |
|-----|-----|-----|
| 稀に | 外に | 其処に |
| 時に | 花に | 中に |
| 前に | 先に | 俄に |
| 後に | 共に | 常に |
| 下に | 滝に | 正に |
| 今に | 只に | 何に |
| 特に | 妙に | 等 |
| 大に | 非常に | 盛に |
| 遺憾に | 残りに | 夙に |
| 明に | 意見に | 時間 |
| 次第に | 余計に | 使に |
| 仕舞に | 終に | 世界に |
| 政治に | 過去に | 自己に |
| 幸に | 天下に | 工場に |
| 人格に | 警察に | 生命に |
| 戦線に | 神社に | 計算に |

△練習 22

I 次の例を読め

1. 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
2. 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
3. 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
4. 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
5. 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
6. 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

44 消えている

II 次の例を書け

1. 他に、地に、げに、眼に、雅に、愚に、児に
2. 折に、土地に、鏡に、桜に、切りに、あなたに
3. 馬鹿に、夢に、芝居に、踊に、僅に、愉快に
4. 親切に、豊に、気楽に、迂闊に、偉大に
5. 満足に、神勅に、玄海に、政体に、自分に

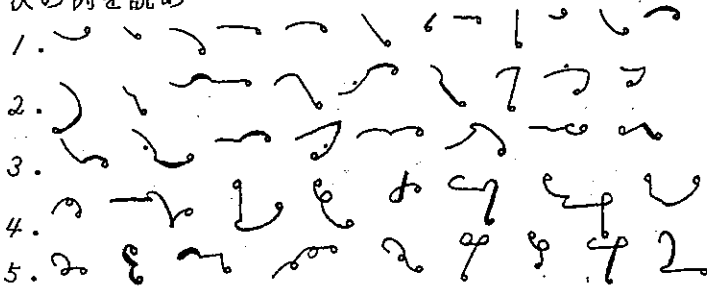
59 助詞「は＝ば」の書方

「ハ」と「バ」とは本画尾端に小円輪を付して表わす。
 ハとバの判別は甚だ容易に為し得られる。即ち文
 意文勢に依って明かに了解せられるのである。又小
 円輪を付す可き所は、直線ならば負側、曲線な
 らば内方である。以下の助詞の場合は皆然りとす。
 従て一々説明が無くても直線の負側、曲線の内方
 と云う事を知らなければならぬ。

例

| | | | | | |
|-----|---|------|---|-----|---|
| 蚊は | 一 | 死は | ゝ | こは | 一 |
| 手は | ↓ | 齒は | ゝ | そは | ↘ |
| 字は | ↘ | 他は | ↘ | とは | ↘ |
| 苦は | ↓ | せば | ↘ | のは | ↘ |
| 無くば | ↘ | なば | ↘ | だわ | ↘ |
| 筆は | ↘ | 町は | ↘ | 金は | ↘ |
| 友は | ↘ | 秋は | ↘ | 今日は | ↘ |
| 今度は | ↘ | 君は | ↘ | 年は | ↘ |
| 感じは | ↘ | 返書は | ↘ | 毎年は | ↘ |
| 前例は | ↘ | 御食事は | ↘ | 規則は | ↘ |

I 次の例を読め

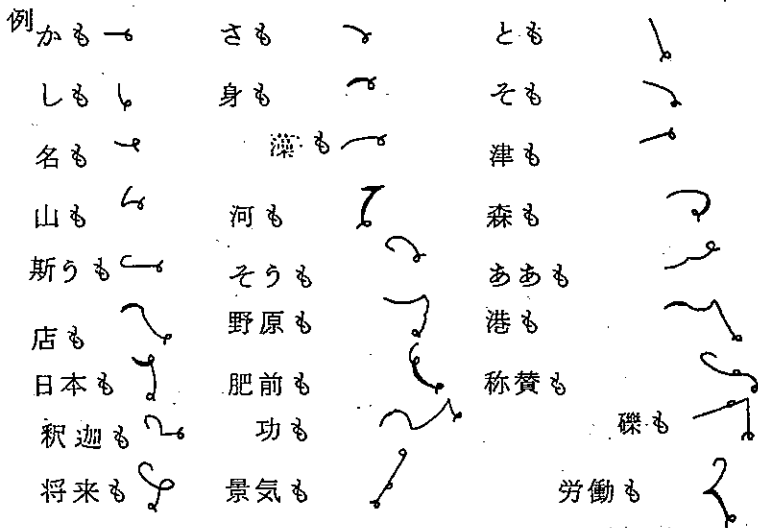


II 次の例を書け

1. かば、せば、けば、そは、のは、とは、こは、だわ
2. あらば、これは、雨は、屋根は、島は、家は、里は
3. 風呂は、風は、行くのは、独りは、気だわ、可いわ
4. 資格は、計画は、人口は、同僚は、臣民は、赤心は

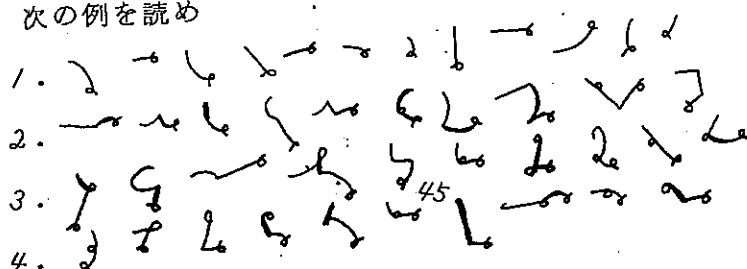
60. 助詞「も」の書方

59の「ハ」の小円輪の末端を些し延長して「モ」を表わさせる事にする。



△練習 24

I 次の例を読め

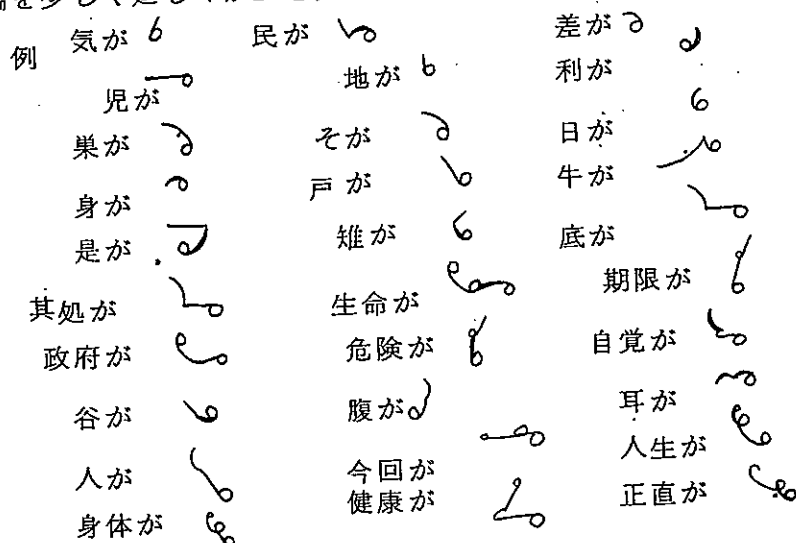


II 次の例を書け

1. はも、せも、だも、にも、こも、ても、のも、とも
2. 幅も、道も、鬼も、下婢も、炭も、鍋も、釜も、座も
3. 注意も、商船も、経験も、序幕も、劇評も、作者も
4. 電柱も、早くも、いとも、さても、とても、までも

61. 助詞「が」及「ガ」の書方

本画末尾に大円輪を付して「が」を表わし 又其円輪端を少し延し「か」を表わさしめる。



- 69 -

62. 助詞「ヲ」の書方

本画の末尾に小楕円輪を付ける。即ち○の様
な形を終りに付けるのである。

例

| | | |
|------|------|------|
| かを | 戸を | 気を付け |
| 藻を | 尚 | 他を |
| 死を待つ | 金を取る | |
| そを | 是を | アレを |
| 波を | 雨を | 霞を |
| 時計を | 裁判を | 光線を |
| 環気を | 感慨を | 姿勢を |
| 否決を | 富士山を | 破壊を |
| 高等科を | 凄壮を | 試金石を |
| 巧妙を | 草履を | 給料を |
| 警護を | | カバンを |

△練習 26

I 次の例を読め

| | | | | | |
|---|----|--|-----|--|-----|
| { | 眼を | | (非) | | (正) |
| | 血を | | (非) | | (正) |

1.

2.

3.

II 次の例を書け

1. 野を、とを、愚を、和を、通を、評を、賞与を
2. 赤面を、市営を、面目を、習慣を、迷信を、奮闘を

63 助詞 「テ」 及 「デ」 の書方

本画末尾に大楕円輪を付けて「て」を表わさしめ其

先端を些しく延長して「デ」を表わさしめる。

例 見て っ もて っ して っ のて っ
 見で っ もで っ して っ ので っ
 府て っ 方で っ そうて っ 云うて っ
 府で っ 方で っ そうで っ 云うで っ
 警視で っ 決して っ 廃して っ はだして っ
 師匠で っ 非常で っ そして っ 増して っ
 師団で っ 奇人で っ 孤島で っ
 見込んで っ として っ
 外套で っ 飲んで っ
 故山で っ 儲けて っ 仕舞うで っ 干して っ
 攫んで っ 嫌いで っ 使うで っ 池で っ

△練習 27

I 次の例を読み

1. っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
 2. っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
 3. っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
 4. っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ

II 次の例を書け

1. まで、やがて、して、もてて、健康で、心配で、騒動で
2. 本気で、請負で、転んで、事えて、確実で、秀才で
3. 進取で、公益で、明年で、止めて、学んで、教えて
4. 猪で、駱駝で、雑煮で、明けて、避けて、ちちかんで

64 助詞「ト」の書方及助詞「ド」の書方

本画末尾に「ノ」なる方向を取る第一種線を付して助

詞「ト」を表わさしむ。但し濃線を用うれば「ド」となる。

例 など 〆 などと ㄣ などとは ㄣ
 けれど ㄣ されど ㄣ なれど ㄣ
 それと ㄣ 云えど ㄣ これと ㄣ

47

然し普通「ど」は「と」と書いて差支なし。尚「などと」

の如きは「なとと」と書いてもよし。

| | | | | | |
|------|---|------|---|-----|-------|
| あれと | フ | 行けど | フ | よしと | フ |
| 彼れと | フ | 来れと | フ | 然るに | フ = フ |
| おれと | フ | 友人と | フ | 外国と | フ |
| 幕府と | フ | 政府と | フ | 次第と | フ |
| 堂々と | フ | 漂流と | フ | 朝鮮と | フ |
| 紳士と | フ | 高評と | フ | 幼児と | フ |
| 日本と | フ | 学説と | フ | 力士と | フ |
| 基本金と | フ | 同期生と | フ | 病院と | フ |

△練習 28

I 次の例を読み

-

47 「問」を「支」とした 48 難読

II 次の例を書け

1. 元金と、戦争と、力と、憲政と、鉄道と、人生と
2. 呼べど、叫べど、云えど、泣けど、経れど、知れど
3. 危険と、辛苦と、世界と、独逸と、主義と、迷惑と
4. 君と、そなたと、月と、花と、紙と、筆と、山と、海と

65 助詞「エ」の書方

本画末尾に | 及 — の方向を取る第一種線を付して

表わさしめる。例

日本へ 鹿へ 布哇へ
彼れへ 有志へ 加え
酒へ 門へ 頭へ
政府へ 朝鮮へ 東京へ

△練習 29

I 次の例を読め

1. { — < } | > S L L
2. ^ / — c L S }
3. 2 { 2 h { 4 4 }
4. 3 2 2 } L ~ 7
5. L L 7 2 3 4 5 6

II 次の例を書け

1. 支那へ、台湾へ、北極へ、捕え、迎え、歌え
2. 咽喉へ、腹へ、精神へ、裁判へ、警察へ、敵国へ
3. 此の世へ、後の場所へ、鉄の扉へ、是をそこへ
4. 金を銀行へ、軍器を露国へ、資本を株券へ

65. 助詞の「タ」及「ダ」の書方

本画末尾に \ なる形の第一種線を添えて「タ」及「ダ」を表わさせる。但し淡線ならば「タ」、濃線ならば「ダ」と読む事にする。

例 来た / 気だ / 見た へ
 でた | 止めた へ 靡いた へ
 換えた / 何だ へ 元気だ /
 遅れた / 奇麗だ / 美事だ /
 開いた / 嘆いた / 解けた /
 招待だ / 無比だ へ 云うのだ へ

注意「\」なる本画線の次に「タ」及「ダ」なる助詞を付する時には少しく方向を曲げて第一種線を添えても可。然し若し紛わしき節には \ 或は \ なる本画線を添えて宜し。

66. 尤も助詞が二音以上から成る時には最後のものを短縮助詞で書く。

| | | |
|------|-------|------|
| のは へ | のが へ | のを へ |
| とが へ | にては へ | して へ |
| とも へ | ので へ | のも へ |
| には へ | にも へ | にと へ |
| では へ | でも へ | でと へ |
| まで へ | かと へ | かも へ |
| かは へ | かが へ | かで へ |
| もと へ | とに へ | でに へ |

△練習 30

I 次の例を読み

- 1.
- 2.
- 3.
- 4.
- 5.

II 次の例を書け

1. 其れだ、あなただ、君だ、無理だ、容易だ、親類だ
2. 敬服だ、有りふれた、望んだ、脹れた、仕舞うた
3. 嘘だ、生命だ、罪だ、防いだ、有用だ、観覧した、
4. 控訴した、宝石だ、命令だ、基本だ、転げた
5. 添えた、増えた、述べた、消えた、延びた

67. 以上述べた助詞の一般的例を示そう。

此人は有名な人だが、僕は知らなかった

例

君は其人と兄弟の様だね

余りの乱暴に我輩も閉口だ

やがて眼が醒めて貴方に詫びるのだ

馬鹿に景気が善いと云う話を聞いた

其の事を思うと 胸が潰れる様な気がして成らん

うーん ーん ーん ーん ーん ーん

あそこに何か恐い者が居ると私は聞いた

ーん ーん ーん ーん ーん ーん

余所の国の有様を見るに其文明と道德とが併行して居ない

ーん ーん ーん ーん ーん ーん

(注意 連続は無暗に上下に長くなっては不可)

色々の理屈は止しにして愉快地話そう

ーん ーん ーん ーん ーん ーん

神は天地の主宰にして 人は万物の霊長

ーん ーん ーん ーん ーん ーん

君の家のは又 笥棒に軒が低いじゃないか

ーん ーん ーん ーん ーん ーん

あとで苦情を出さないと誓い給え

ーん ーん ーん ーん ーん ーん

誰の罪か ここでは云わないで置こう

ーん ーん ーん ーん ーん ーん

敷島の大和心を人問わば

ーん ーん ーん ーん ーん ーん

朝日に匂う山桜花

ーん ーん ーん ーん ーん ーん

68 助詞の活用は甚だ大切であるから学習者は最

も注意して練習せねばならぬ。又助詞なるものの

性質も充分理解して置く必要がある。

I 次の例を読め

- 1.
- 2.
- 3.
- 4.
- 5.
- 6.
- 7.

II 次の例を書け

1. 私の机の上にどんな本があるか。
2. 何か訳の分らん事を続けて叫んだ。
3. 天にも地にも代える事の出来ない我が独り児。
4. 汽車と汽船と自動車と何れを撰むか。
5. 田舎の人は呑気だが都の人は反対だ。
6. 鶏が二三羽遊んで居る午後の庭先で
7. 花が咲いた。鳥が鳴く。蝶々が飛ぶ。
8. 昨日は大坂で憲政擁護の演説をした。
9. 是は君がお書きになった小説との事で。
10. 今一度の御説明が願えませんか。
11. 父の姉は米国の或る女学校を卒業した。
12. 手を替え品を替えて依頼に来た。
13. 人は芸術を解し芸術に生きなくてはならないわ。
14. 舌の根の乾かない内にそんな事を云うのかね。